

親ガチャ失敗〇」が恩師に会いに行つて、そのまま軟禁溺愛される話

高校卒業後、八年働いた。初任給はもちろん、今の今までもらった給料のほとんどを親に取られて、それでもぎりぎり死なない程度に生かされきた。

なのに体の限界が来て、もう無理だった。何をして、していなくても涙が止まらなくなつてしまった。きつと壊れてしまったんだと思う。

勝手に会社を辞めてきた私を、母はなんと言うだろう。出来損ない、親不孝、産まなきゃよかった……。これまで言われてきたあらゆる罵倒が頭の中に渦巻く。

いっそ電車で飛び込んで、最後の最後に親に迷惑をかけてから、死のうか。

だけどその直前、ふと八年前にした口約束を思い出して、死ぬならせめて先生の顔だけは見ておこうと思つた。それだけ。

卒業してから初めて訪れた高校は、八年経っても何も変わっていないかった。

社会人一年目のときに買ったくたびれたスーツ姿の私は、さぞかし怪しく映っているのだろう。好奇心に満ちた下校途中の女子高生の視線が、無遠慮に刺さる。

正門をすり抜けて、あたかも「ここの教師に用があるのですよ」という雰囲気醸しつつ、教員用の駐車スペースへ向かう。

先生はまだこの学校にいるだろうか。

いたら、今度こそ母から逃げて、もう少し人生を頑張ろう。

いなかったら、今日、この後すぐにでも駅のホームから飛び降りてやろう。

目指すは、生まれ年をナンバーにしている黒いセダン。このディーラーの車には憧れていてやっと買えたものだから、ずっと乗り続けると言っていた。

先生の車は、今どきの軽自動車が多く占める駐車場の一番端、学校を囲む塀に沿って植えられた桜の木の下にあった。数日の雨で散ってしまった桜の花びらが、ところどころについている。

まだこの学校にいたんだ……。

それだけの情報で、すでに壊れきった涙腺から涙がこぼれる。

目的は果たせた。不審者として通報される前に早く敷地から出よう。

そう思って、来た道を戻ろうと踵を返す。

「――相変わらず前髪長えのな。切ってやるのか？」

どこからか先生の声が聞こえた。空耳かと思ったたら、黒いセダンの運転席が開いて先生が出てきた。とうとうストレスで涙腺だけじゃなく頭もおかしくなって、幻覚でも見始めたのかと思った。

「……せ、」

「久しぶり。あれ、何、お前泣いてんの？」

八年ぶりに見る先生は指に挟んでいたタバコを携帯灰皿に押し込むと、目尻を下げながら野暮ったく伸びた私の前髪に触れた。

初めて話したときのことを思い出して、喉が詰まって鼻が痛くなって声が出ない。うつむいてボロボロと涙を流すだけの私に、先生の声は優しく響いた。

「卒業して、八年か？」

「が、頑張れませんでした、ごめんなさい……」

ぼろぼろと泣きながらようやく絞り出した声に、先生が声をあげて笑った。

「何が。立派だよ。頑張ったな、お疲れさん」

ふいに腕が伸びてきて抱きしめられる。高校生の頃は叶わなかった距離だった。

「約束も、ちゃんと守れたな」

えらいえらい、と、子供をあやすように先生が私の頭を抱えて、ぐしゃぐしゃと乱暴に撫でた。えらくないのに。ボロボロになってただ逃げてきただけなのに。

先生の背中に腕を伸ばしていいのかわからずに棒立ちになりながら、先生に会えたことや私を覚えていてくれたことが嬉しくて、さらに泣いた。

先生は私の初恋の人だった。

伸ばしっぱなしの私の前髪に触れる、優しい指が好きだった。

卒業式を終えて先生に会える最後の日、全部伝えたかったけど言えなかった。

「さっきタバコ吸ったばかりだから、煙たいかもしれないけど、あと二時間待って。飯食いにいこう」

ひとしきりなだめられて、ごくごく自然な流れで後部座席を開けて座るよう促される。

ダッシュボードから出したティッシュを箱ごと渡すと、先生は私に「行ってくる」と告げて校舎へ戻っていった。その後ろ姿を見送ってから、サイダーのような甘い芳香剤とタバコの香りが混ざり合った後部座席に寝転がった。

高校在学中の頃から変わらない。

いつからだったか、先生と話すようになってから、昼休み中の私の定位置はずっとここだった。

ほかの先生や生徒に見つかからないようにここに座って、先生とたくさん話した。自分のこと、家のこと、将来のこと。どれも漠然として主体性もまとまりもなく、きつと困らせていただけかもしれないけど、先生は私の話を卒業するまで聞いてくれた。

私の母親は今でいう「毒親」というやつで、私は女手一つで産んでもらい育ててもらった恩を返すために、高校卒業後は、なにがなんでも働いて親を養わなければならぬと言われ続けて育った。

小学校低学年あたりまでは「普通」だった気がする。変わったのは、私が第二次性徴を迎えた頃だったと思う。母親は、私が「女」になるのをとにかく嫌った。

黒い髪ゴム、シンプルなヘアピンひとつ、カバンの中に転がっているだけで「色気づいた」と怒り狂うような人だった。だから化粧なんてものはもちろん論外で、

一般的なスキンケアや身につける下着、服、髪型、爪まで、変えるにはすべて母親の許可がなくてはならなかった。

中学の頃はまだよかった。だけど高校になるとメイク一つくに知らない私は、途端に周りから変わり者と見なされ、家でも学校でも生きづらくなった。

アルバイトくらいできればよかったのだけど、母親は私が学生のうちからお金を持つことを嫌がった。「学生のうちは勉強だけしていればいい。社会人になったら金を稼げ、そしてその金は私が管理する」というのが母親の持論だった。

私があまりに外見に無頓着だったせい、指導しても前髪すらまともに切ってこない私をいぶかしく思った先生にさんざん聞かれて、家のことを白状してしまっただ。

親の管理が厳しくて自分一人じゃ何も決められない、と。

ただの言い訳にとられると思っていたのに、先生は「やっぱりか」とうなずいた。詳しく聞けなかったけど「俺も一緒」だと、先生は苦笑いをした。

辞めてしまったけど、今の職場を推薦してくれたのも先生で、高校を卒業しても、私が生きていられるように「約束」をしてくれたのも先生だった。

先生のことは好きだったけど、それ以上に私にとって恩人で命綱みたいな人で、生きる糧だった。

「おわ、よかった、いた。外から見えないから、どこか行ったのかと思った」

昔のことを思い出しながら横になっていたら、泣き疲れたのかいつの間にか眠っていたらしい。後部座席のドアを開けて、先生がのぞき込んでいた。夕暮れだった外はすっかり日が落ちていている。校舎と生徒玄関、駐輪場までの道だけ等間隔に埋め込まれた明かりに照らされていて、周りはずっと暗かった。

「あ、今、何時ですか」

先生に聞いておきながら、焦ってバッグからスマホを取り出す。十九時過ぎ。新着メッセージは三件。不在着信は五件……。

まずい、連絡しないと。いつもなら十七時半には仕事が終わっていることになっている。残業なんて滅多にない職場だったから、今から嘘をついてもばれてしまう。

同じ名前で埋め尽くされた着信履歴の一番上を押す。表示された電話番号を見て、血の気が引く。

きつとめちやくちやに怒っているに違いない。慌ただしくなる心臓を落ち着かせるために深呼吸をする。まずは、謝って、すぐに帰るって言って、それから……。いろいろ戸惑っているうちに、手の中でスマホが光って震えた。驚いて落としてしまう。

「あっ」

「出るな」

フロアマットに落ちたスマホを拾おうと体を折り曲げると、先生がぴしやりと言った。

「出なくていい。貸して、俺が持っておく」

先生は険しい顔をして私からスマホを受け取ると、運転席を開けて助手席のシートへそのまま投げた。ぽんと転がったスマホはシートの上で規則的な振動音をたてている。それを打ち消すようにエンジンがかけられた。

「あ……」

「なに食べたい？」

振り返って、尋ねられる。とっさに思いつかなくて「なんでもいいです」と答えてしまった。だめな回答なのはわかってはいるけど、それ以上にスマホが気になってそれどころじゃなかった。

「なんでもいいなら焼き肉にするぞ。肉食おう。退職記念。金曜だし、明日休みだし」

前を向き直した先生が、バックミラー越しに目尻を下げた。こくりとうなずいたのと同時に車が走り出す。

普段ならこの時間は、母に頼まれたものを買いにスーパーへ行っている。いつも会社と近所のスーパーと家だけの往復。休日は家中の掃除。友達もないから、誰かどこかへ出かけた記憶はほとんどない。

金曜の夜、帰宅ラッシュの時間帯のせいか、ベイブリッジにさしかかると車の動きがゆっくりになった。赤いテールランプの群れを見ながら、このままでいいのか急に不安になる。

「先生、あの、スマホ……」

「んー？」

「心配かけるといけないから……」

そんなことは絶対にないけど、ただど万が一、このまま電話に出ないで搜索願でも出されたら、一緒にいる先生に迷惑がかかるかもしれない。あの人はそういうこ

とを平気でする。周りを巻き込んで被害者面をして、私は「お母さんに迷惑をかけているダメな子供」に仕立て上げられる。ずっとそうだった。

「……うん。電話は出るなよ。メッセージだけ返しな」

先生はため息を一つついて、私にスマホを手渡した。着信履歴は二桁を超えていた。

メッセージアプリを開き、どんな文面を送ろうか考えている間も、途切れては同じ番号が表示される。母親からきていたメッセージは読まないようにして、「飲み会になったから遅くなる」とだけ送った。

既読はすぐについた。だけど嘘をついたことの罪悪感と、電話を無視をしていることが怖くて、返信が来る前に画面を暗くした。

「なんて送ったの？」

「あ、……飲み会で遅くなるって」

「ん、それでいいよ」

「寄越して」と、手を伸ばされて、鳴り止まないスマホを先生に手渡す。メッセー
ジを返して自分の手から離れただけで、少し気が楽になった。

コインパーキングに車を停めて、連れてこられたのは繁華街のなかにあるこぢん
まりとした焼き肉屋さんだった。炭火の匂いが充満したカウンターと、複数がけ
のテーブル席が五つくらいだけの小さな店内は、すでにスーツ姿の男の人達でほと
んど埋まっていて、私達は出入り口に一番近い四人掛けの席に通された。

「好きな頼んでいいよ」

先生から手書きのメニューを手渡される。常連なのだろうか。

水とおしぼりを持ってきた明るい髪色をした大学生くらいの女性店員からも「先
生」と呼ばれて、笑いながら話している。

「お悩みでしたら一番高いのどうですか？」

「えっ」

突然、話しかけられて顔を上げると、「先生なら払ってくれるっしょ？」と先生の顔を見て店員が笑った。

「おー、いいぞ。めっちゃいい肉食おう。お前のバイト代に還元してやる」

「どれだけ払ってくれても、時給なんで変わんないすけどね」

「かわいそうに。ポケットマネーやろうか？」

機嫌良く話しながら先生が財布を出そうとしたのを、「本当にやるんだよな、この人」と呆れたように笑って店員が止めた。

「酒は飲めるんだっけ？」

「えっと、忘年会くらいで、あまり飲んだことないですけど」

「じゃあ飲むか。他のも適当に頼んでいい？」

「はい、お願いします」

結局、メニューを手渡して先生に選んでもらった。

初めに来たグラスビールを傾けて数種類の肉を焼いている間、サラダを食べながらお互いの近況を話した。

先生は卒業式を終えたばかりで、忙しいのか暇なのかよくわからないと言っていた。受け持っていた学年は二年生だから、特別、感動するものでもないしと。私はその話を聞きながら、また学生時代のことを思い出して胸が痛くなる。

「あの、先生、仕事辞めてしまって、本当にごめんなさい」

「俺に謝る必要はないぞ。教師として進路指導しただけなんだから。仕事だよ、仕事。入社した後のことはお前が決めることだし、合わなくて辞めるのも違う職種に興味出て辞めるのも、自由だろ」

だけど、本当に申し訳ない。あのとき、学年のほとんどが進学するという中で、就職を選んだのは私だけだった。ただでさえ前髪のことです生徒指導に引っかかっていて成績も平均的で、部活も生徒会も入っていないくて、内申欄に書くことのない私に、ほかの先生はどう扱っていいのかわからなかったようだ。

それなのに先生は、どんな方法を使ったのか、県内では名の知れた企業に推薦してくれた。

「俺はさ、お前が生きてて、こうして会いに来てくれただけで十分」

「……………」

生きてて、の言葉が胸に刺さる。在学中は何度も言っていた。「生きててくれればいい」。それが救いだったり、重荷になったりした。

「もしかしたら会わない間に、お前の親が変わってくれてたり、お前が会社の奴と付き合ったりして、ちょっとは楽になってんのかなって思ったりしてたんだけど。

それはそれでお前が幸せなら全然いいんだけど」

「それは、ないです……」

「そうみたいだな」

あっけらかんとした口調で先生が笑った。先生が食べた枝豆のからが、ちょっとした山のように積み上がっていく。

「……まあでも、仕事辞めたのも俺に会いに来れたのも行動力があることだから、この先もなんとかなるとは思ってるけどな」

根拠のないことを言われながら、焼き上がった肉がどんどん小皿を埋め尽くしていく。慌ててトングをつかんで同じようにやろうとすると「無礼講」と遮られてしまった。

やることもなく、ただひたすら先生が焼いてくれた肉を食べる。焼き肉というよりも外食自体が久しぶりで楽しくて、少し浮かれていた。根拠のない言葉を信じてみようと思う。

「先生、あの、私、親から離れようと思います」

お酒を飲んだからというのもあるのだろうか。直前まで後ろ向きだった気持ち、口に出したことで少し前を向いてきた。

「どこか、住み込みでもなんでもいいから、家から出て」

自分で言いながら、気づいて、驚いた。そうだ。親から離れる方法はいくらでもあるのだった。私はもう成人しているし、本当は何をやるにも親の許可なんて必要ないのに、どうして気づかなかったのだろう。だいぶ毒されてとらわれていた。母親に対する気持ち、未だに学生のままであった。

「……そうか。腹決めた？ 鈍るなよ」

「が、頑張ります」

少し眉をひそめたそぶりの先生の目を見ながら、笑うくらいの余裕がでてきた。久しぶりに飲んだアルコールが体中を巡って熱い。酔うと本性が出やすいと言うけど、本音もそうなのだろうか。

「でも私、本当は先生に近くいてほしいって思います。知らない土地でひとり、怖いから」

頑張ろうとは思う。だけど一人きりは怖い。そういうところが甘いのかもしれない。

「あの、だから、れ、連絡先を教えてもらってもいいですか？ 不用意に電話かけたりはしないで。離れた土地に行くならもう簡単に会えないし、お守り代わりというか……」

べらべらと言ってしまったてから後悔した。さっきまで笑っていた先生が急に真顔になったから。いくらこうして再会してご飯と一緒に食べても、先生と私は、教師と元教え子なのに。

調子に乗っていたようだ。先生とは少し話すくらいで、私はあのアルバイトの女の人と同じ立場なのに、特別大事にされていると勘違いして浮かれていた。

「……ご、ごめんなさい」

「いや、連絡先くらい全然いいんだけど。その前にお前、番号変えたほうがいいぞ。さっきから俺の隣がすげえうるさい」

先生が隣の椅子の背もたれにかけたジャケットから私のスマホを取り出した。

手の中で画面が光っていて、待ち受け画面が表示されたと思ったらまた震え出す。

受け取ろうと手を伸ばすと、さっと手を引っ込められた。

「……教育と洗脳は紙一重だよな」

苦い顔をして、先生がため息をついた。

「え？」

「いや。今からお前は酔い潰れたってことね」

そう言うと先生は片手を上げて、店員を呼んだ。

入店時に注文を取りに来た女性店員がやってきて、私と先生の顔を交互に見ながらなにか話し出す。

店員はふんふんとうなずいたかと思えば、先生から私のスマホを受け取って画面をタップし耳に当てた。

「えっ」

驚いて声をあげると、先生が「静かに」と人差し指を唇に当てる。

その間、店内の喧噪に紛れて母親の怒号がスピーカーから溢れた。体がびくっと跳ねる。

女性店員は一瞬、スマホを耳から離れた後、負けなくらいの音量で、自己紹介と、自分は私の後輩だということ、私が酔い潰れてしまったから部屋に泊めるということを伝えた。

それから「あ、上司が代わって欲しいみたいなので代わりますねー」と軽い調子で、先生にスマホを手渡した。

笑いをこらえていた先生が私のスマホを受け取ると、普段より一段階高い声で「お世話になっております」と言いながら席を立ち、そのまま店を出てしまった。

追いかければいいのかどうすればいいのか一瞬悩んでいると「お姉さんも大変だね」と声をかけられた。

「電話の、お母さん？　すごいね、出た瞬間、殺すって言われちゃった」

「す、すみません……」

「いいよー、全然気にしてない。客にもいるから。外面だけはいいんだよね、ああいうの。あたしが名乗ったら手のひらくるくるしてた。あとは先生がなんとかしてくれるから、気にせずお腹いっぱい食べてくださいね」

今日会ったばかりの人に家庭のことを知られて、恥ずかしくて情けなくて恐縮する。席から離れる店員にペコペコと頭を下げていると、先生が戻ってきた。

「あー、たぶん今日はもうかかってこないと思うけど」

「す、すみません、本当に」

「いや、お前のせいじゃない。ないんだけど、ごめん、酒飲む。人の親ながらアレはかなりきつい」

先生はスマホをまたジャケットのポケットに入れて、ビールを注文した。ひとつだけだと思ったのに運ばれてきたのは二つのジョッキグラスで、そのうちの一つを私に手渡すと「仕切り直すぞ」と先生がジョッキを掲げた。

母親は先生とどんな話をしたのだろう。先生が呆れるくらい、なにか私の不出来なところを言ったのかもしれない。聞きたかったけど先生に嫌われるのが怖くて聞けない。

それよりも明日、無事でいられるだろうか。外泊したことはもちろん言われるだろうし、会社を辞めたこともバレたら……。殺すとか死ねとか、そんな言葉はいつも言われていることだから慣れているはずなのに、この次は本当に実行されそうで怖い。お金を運ばなければ、私はただのお荷物だから……。

先生の顔を見て話していなければ、嫌な想像ばかりしてしまう。

「帰らなきゃ」と何度も思って、「帰りたくない」という気持ちがあるのを打ち消す。私は無理やり、飲み慣れない酒を飲んで料理をお腹に詰めた。

せめて今日、あと数時間、この場限りでも何も考えられなくなるくらい、酔ってしまいたかった。

額のあたりがくすぐったくて、誰かに触られているような気がして目が覚めた。視界が暗くて、嗅いだことのない甘い良い香りがする。

「……起きた？」

ベッドのふちに腰を下ろした先生が、横になっている私の額に触れていた。長く伸びた前髪をよけて、指先でなぞるような仕草だった。

「……先生……？」

「気分悪くないか？」

私はうなずいて「大丈夫です」と答えた。気分は悪くない。でもなんだか体が宙に浮いたようにふわふわしている。まだ酔っ払っているのかもしれない。

いつのまにか寝てしまうほど飲んだことはなくて、初めての失態に焦る。先生は起き上がろうとする私を遮って、今度は熱を測るときのように額に手を乗せた。

「熱は、ないですよ……」

「うん、ぬるくらいだな」

先生の手のほうが温かった。よしよしするように撫でられて、自然に目を細めてしまう。気持ちいい。

今度は大きな手のひらが包むように頬に触れた。「冷たい」と先生が呟く。

部屋が暗いせいか先生の表情がよく見えなくて、いけないことをしている気持ちになる。

「なに？」

「……あの、くすぐりたいです」

そっとはがすように先生の手の甲に触れる。

初めて触れるそれは自分のよりもはるかに大きくてゴツゴツと骨張っていて、先生の声がしなかったら、知らない男の人みたいだった。

先生は暗がりの中で少し笑って、頬から手を離さないまま、親指で私の唇を撫でてきた。反射的に肩が震えて唇をぎゅっと結ぶ。

「これも、くすぐりたい？」

つうつと指の腹が唇を往復して、私はこくこくとうなずいた。くすぐったい……。だけどそれ以上に恥ずかしい。ふざけて冗談を言うことはあるけど、こんないたずらをするなんて先生らしくない。先生も酔っているのかもしれない……。

無意識に息を止めていたのを思い出して、呼吸をするために唇を少し開けた。

「ッは、……んんっ」

「ああ、口の中はあったかいんだな」

「あ……ッ、あ、あえ……」

入り込んできた先生の親指がぐにゅぐにゅと舌を押しつぶすように撫でる。

先生の手が私の顔を挟んだまま固定しているせいで、首を横に振ろうとしても指が抜けてくれない。

くちゅくちゅと舌を刺激されて、唾液がどんどん溢れてくる。飲み込みたいの、口を閉じれば先生の指を噛んでしまいそうで、口を開けたままだとうまくできない。先生の手首を両手でつかんで押し返そうとしても離れてくれない。それどころか、わざとらしく口の中をかき混ぜて、いやらしい音をたててくる。

「あつ、ん……ん……っ」

「……初めて見る、その顔。声も」

私の口の中を弄んでいる先生が、耳元で低く嬉しそうに囁いた。

「やっぱり可愛いな、お前」

そんな声が聞こえた直後、口の中に埋まっていた指が抜かれて、今度はぬるく肉厚な舌が入ってきた。触れるだけのキスすらしたことのない私の体はその瞬間、電気が走ったように跳ねた。

「ん、……く、ふうっ、やあ……う、んッ」

ぢゅっ、ちゅるっ、ちゅぷっ、くちゅっ……

粘着質な音を立てながら、先生の舌が私のを舐めて吸い付いてくる。ピリピリとした痛みに似た感覚が怖くて、私はとっさに目の前にあった先生のシャツにしがみついた。

「あっ、んあ……っ、せん、せえ……んんっ」

息が苦しくて顔を背けても、先生の指先が私のあごをつかんで何度も正面を向けられてしまう。頭がぼうつとして、シャツを握っていた手の力も抜けてくる。

ようやく唇が離れたかと思うと、先生は私の頬を両手で包んだまま額をこつんと合わせた。

「……ずっとうしたかった」

「……っ、……ふ、……え……？」

息を整えるのに精一杯なのと酔いの回った頭では、先生の言っている言葉の処理ができなかった。首をかしげて次の言葉を待っていると、顔を上げた先生がふっと笑った。

先生だけど、先生じゃないみたい……。

目が合ってじっと見据えられると急に恥ずかしさがこみ上げてきて、不自然なくらいに勢いよく顔を背けてしまった。

「……なんでぶいってしたの？」

「ひゃああっ」

首すじを思いきり舐めあげられて、自分でもびっくりするくらい甲高い声が出てしまった。慌てて口を手で覆って、声を押し殺す。

「んっ、んん……っ、ふ、っ、うう……」

面白がって笑う先生の舌が耳たぶへ移動して、ちろちろと舐めたり甘噛みをしたり忙しく動いた。その間にも、着古してゆるくなったブラウスのボタンが簡単にぶちぶちと外されていって、白いカップ付きのキャミソールをめくり上げられる。

いくら部屋が暗くても胸もない痩せた体を見られるのは嫌だ。

先生の周りには若くて可愛い子がいっぱいいて、野暮ったい自分と比べられたらと思うと悲しくなる。

一瞬のうちにそんなことを考えて、とっさにお腹を撫でる先生の手に爪を立ててしまった。

「せん、せ……え……、くすぐつ、たい……から、」

言い訳のように言葉を絞り出す。

「……うん？」

「だから、もうおしまい……」

両手で、ぎゅうつとつかんで先生の手の動きを止める。肋骨のあたりに潜り込んでいた先生の指先は、体を起こして無言で私を見下ろしたままそれでもどうこうしない。

「やだよ」

少し機嫌を損ねたような声の後、ぱしつ、と手を振りほどかれてしまった。片手を掴まれてそのまま顔の横に押しつけられて、肋骨に触れていた指がさらに奥まで進んで胸の先端を弾く。

「……あつ」

あっけなく触れられた乳首をカリカリと爪で擦られて、むず痒さにもじもじと体をよじらせる。だけど与えられる刺激に比例して乳首はどんどん硬さを増して、とうとう我慢できずに腰が浮いてしまった。

「ひ、やああ……っ」

指先できゅうつとつまみ上げられたのと同時に、キャミソールをたくしあげた先生の唇がもう片方の乳首に吸い付いた。ひくんつと腰が跳ねて、頭のでっぺんから足の爪先まで電気が走る。

「あつ、……んあつ、あー……っ」

唇に含まれたまま舌先で転がされて、痛いくらい勃起しきった乳首がさらに主張してしまう。指でくにくにとしごかれてるほうも、痛くて苦しいのに、息を吐くたびにお腹の奥に熱が溜まって震えてしまう。

「はぁ、あつ、は……っ、ううん……っ」

先生の舌が乳輪全体を覆うように、ねろお、と舐めて、吸い付いた。くちゅくちゅと音を立てて舐られて、声が出ないくらい快感が体中を走る。首すじを仰け反らせて、擦り合わせた足の間から、くちゅ、と水音が聞こえた。

「あ……、は、あ……」

自分の意思に関係なくひくひくと体が震える。目の前が白く弾けて、口をぽっかり開けたまま肩で呼吸を繰り返す。

先生の手のひらが、上下する下腹部を撫でた。「あ……っ」と短く叫んだ頃には遅くて、指先がスカートの裾から足の間に到達していく。

ストッキング越しに脱力した部分をあっけなく触れられて、先生の指が往復するたびにぷちゅぷちゅと空気を含んだ水音が鼓膜を刺激する。

「く、ふうう……、んうっ……やああっ、あっ、あ……っ」

「……これは？　くすぐりたい……？」

私の胸の上で、先生がささやいた。下着越しにくちくちと敏感な突起を撫で転がされて、足を閉じたくても声を抑えたくても、力が抜けてうまくできない。

「っ、ううん……っ、ふ、……うあ……っ」

「じゃあ、気持ちいい？」

ふるふると首を横に振る私に、先生が核心を突く言葉をぶつけた。ぶわりと顔中が熱くなる。認めるのは恥ずかしい。だけでもうバレてしまっている。だから余計に……。

ひく、と喉が鳴って、顔の横に押しつけられていた手に力がこもる。

「わかりやすいな」

「――あつ、……せん、せ……っ、だめ、……だめ……っ、ゆび、とめてえ……」

先生は薄ら笑いを浮かべたまま、私の敏感な部分を痺れるくらい何度も擦りあげた。とろとろの愛液がお尻まで垂れて、腰をくねらせるたびに下着がねっとりと張り付く感じがした。

くちくちくちくちっ、くちゅ、カリカリカリっ

「っ、ひ…、や、あああ――……っ」

擦られてぶっくりと大きく膨れたクリトリスをさらに爪で引っかかれて、先生の手を挟んだまま太ももを震わせる。

「は、……はっ、ううっ」

胸を舐められたときよりも強くて重たい波は、どつぷりと私を覆い尽くしたままなかなか引いていかない。

横向きになって私の隣に寝転んだ先生の腕の中でびくびくと痙攣していると、爪で引っ掻かれたストッキングが破られていく音がした。

驚いて顔を上げようとすると、頭ごと抱えられて先生の胸に押しつけられる。下着の隙間をかいくぐるように細長い指が直接私の粘膜に触れた。

「……っ」

「ああ、すごいな」

熱を帯びた声が耳元で聞こえる。

入り口をゆっくり往復しているだけなのに、さっきよりも濡れた音が直接耳に響いて恥ずかしさで目をかたくつぶった。

にちゅにちゅと愛液を塗りたいくらせていた指先が、ゆっくりと中に入ってくる。

「あ、うう……っ」

「痛い？ 濡れてはいるけど」

ふるふると首を横に振る。痛くは、ない……。けど、お腹に異物が入っているように、今まで感じたことのない違和感がある。

そんな余韻に浸る暇もないまま、先生の指はさらに奥へと沈んでいって根元まで入りきると、お腹側をえぐるように関節を曲げた。くちゅ、くちゅ、と指先を曲げて、私の反応を確かめるゆっくりとした動きだった。

「う、あ……っ、はあ……ああ……っ、んああっ」

ぬちぬちと掻き混ぜられて、また背中がぞくぞくと粟立つ。自分でも知らなかった気持ちいい場所を探られて、力が抜けて口がだらしなく開きっぱなしになる。

がくがくと震える太ももの間には先生の膝が入りこんでいて、クリトリスをいじられたときみたいに足を閉じられないようになっていた。

体も密着しているせいで、好き勝手に動く先生の手を制御できない。

「あー……っ、んや、ああーっ……」

「ここ、気持ちいい？」

確かめる声に反応できなかった。それなのに指の動きが速くなる。言わなくても、きつともうわかっちゃってる……。

くちゅくちゅと股の間から音を鳴らして、震えっぱなしの太ももが先生の足をはさんで締め付ける。

くちゅくちゅくちゅくちゅっ…にちゅにちゅっ…

「あぁっ、あーっ、……ん、い、……くう……っ」

先生の背中に腕を回してしがみついて、足が爪先までピンと伸びる。息が止まらず、痙攣した膣内が先生の指をきゅんきゅんと喰い締めてしまう。先生の指は動かずにそのまま、私の中の感触を確かめているようだった。

「……は、あふ……んっ」

にゆぶつ、ちゆくつ、と音を出しながら指の抜き差しを繰り返される。膣内はただ落ち着かずにうねったままだ。それなのにさっきの墮とされるような感覚がごく気持ちよくて、もう一度してほしくて、気づかれないようにゆるく腰を動かしてみる。

蜜口のすぐ入ったところ、陰核の裏側のちょうどへこんだところに指の腹が当たる。そこがえぐられて擦れるたびに、ひくひくと膣内が収縮した。

「ここも？ 気持ちいいところ」

「は、……ふ、あ、…はいい……」

「素直だな」

先生が、よしよしするように私の頭を撫でた。ちゃんと素直になれば優しくしてくれる……。それが嬉しくて、うわごとみたいに何度も「気持ちいい」と繰り返した。

「せんせい……、せんせい、きもちいい……、そこ、ゆびで、とんとんするの……っ」

「ん、すごいな、ずつとびくびくして締め付けてくる……だんだん馴染んできたし、指、もっと増やそうか」

「ふ、んあっ、ああー……っ」

くちゅりと音を立てて指が二本に増やされて、私の膣内はそれをすんなりと受け入れた。今度は入り口あたりじゃなく、さっきみたいに初めからゆっくりと奥まで入ってくる。

ぐぢゅぐぢゅと乱暴にかき回されているのに全然痛くない。膣壁を擦るところ全部が快感のスイッチみたいになっていて、むしろ頭が真っ白になって何も考えられなくなるくらい気持ちいい。

ぴちゃぴちゃと蜜口から愛液を飛び散らせながら私は先生に訴えた。

「あ……、ああっ、せんせ、おなか……っ、いつ、く……イッチャ……あ」

「イツちゃうの？ もう？ さっきイツたばかりだろ」

「だ、って、きもちい…っ、きもちいいとこ、いっぱいあたって……っ、ああっ、あっ…は…っ」

ぶる…っ と体が大きく震える。膣内がぎゅうう、と締め付けを繰り返しても、ぐにぐにと掻き混ぜる指の動きは止まらない。

蠢動しっぱなしの肉壁をほじくるようにこじ開けて、奥の膨れ上がった子宮口を何度も撫でられてると、ぐうっ と背中が反り返る。耐えられない快感に視界がばちばちと白く爆ぜる。

「……あ、は、あー…っ…っ、ひ……っ」

ぢゅぽっ と粘ついた音を立てて指が抜かれた。先生の指にまわりついた体液は透明だったりと白く濁っていたりで、指だけじゃなく手のひらから流れてワイシャツの袖口まで汚していた。

呼吸を整えるふりをしながら、指についた私の体液を躊躇なく舐めとっている先生を盗み見る。さっきまで余裕そうに笑っていたのに真面目な顔つきをしていた。霧囲気に飲まれて色っぽくも見える。

「ーふく」

「え……」

「服、全部脱がしていい？ もっと触りたいから」

私が何かを言う前に上体を起こされて、するするとブラウスもキャミソールも腕から抜かれていく。

下半身に視線を移されて太ももを撫でられながら「……ストッキング、破っちゃった。ごめんね？」と軽々しく謝られる。だけど、上半身を裸に剥かれている恥ずかしさと心細さで、私は「だいじょうぶです……」としか言えなかった。

それから、洩る先生に訴え続けて、なんとか布団の中へ潜る許可をもらった。ひんやりと冷たいシーツのおかげで酔いが冷めて、いくらか理性が戻ってきた。

「あ、せんせい……」

「ん？」

ワイシャツを脱いで半裸になった先生がベッドの中に入ってきた。抱き寄せられて額やまぶたに、ちゅ、ちゅ、とキスを落とされる。

「わ、私、最後までしたことない、です……」

私の体を撫でる手の動きが止まった。

「……嫌？」

「……いえ、あの、……お手を煩わせるかもしれません……」

初めては痛いと思う。血も出るとか。面倒くさいと思われたらどうしよう……。今言うことではないし、散々、先生の指で絶頂しておいて今さらとは思っけど、指とアレでは太さも長さも比じゃない。

向かい合った下腹部に当たるスラックス越しの膨らみを認識すればするほど、期待とか嬉しさよりも怖さが勝る。

「いいですよ？ どうぞ煩わせてくださいよ」

「あつ……」

ふざけた調子でくつくつと笑いながら、先生が私を組み敷いて膝を割り開いた。心の準備ができないまま、熱い先端があてがわれる。何度もイカせられてとろとろに濡れそぼったそこは、私の気持ちと裏腹に受け入れる準備をしている。

ぬちゅ、ぬちゅ、と蜜口と熱い先端が擦り合わせる。

「ふ……ッ、くううつ……」

息を止めて、みぢみぢと掻き分けられていく感覚に耐える。やっぱ指とは比べものにならない。内臓が全部押し上げられて、位置が変わってるんじゃないかと思うほど苦しいのに……。

「は、あ……っ、ああっ」

「痛いかな？」

「あ、だいじょうぶ、です……」

全然、痛くない……。でもお腹の中が苦しくて熱くて、痺れたようにじんじんする。

ぐん、と沈んでくる先生の重さを受け止めながら、必死になって体に酸素を取り込む。

お互いの骨盤が当たって体がぴったりと密着すると、先生は私の頭を撫でながら、涙がにじむ目元をペるペると舐めた。

「はあっ……はうっ……」

息を吸うたびにナカが吸い付いて、先生のかたちを感じ取ってしまう。

背中に腕を回してしがみついたまま荒い呼吸を繰り返す私に、さらに追い打ちをかけるように先生が唇を舐めた。

こじ開けるように舌が入ってきて、思考停止した頭がそれを受け入れる。

「んっ、ふ、……ちゅっ、ん、はっ……あ、あ……んんっ」

大きく開いた口の中全体を舐められて、息継ぎがうまくできないのに、舌を舐められるのも気持ちよくて自分から差し出して絡めてしまう。

涎をこぼしながら先生の舌を夢中になって貪っていると、ゆるゆると体を揺さぶられる。

先生のでみっちりと埋まった腔内が、無理やりかたちを変えられていく。

「ああ……っ、うごかな、で……っ」

「だめ？　せっかく気持ちいいのに」

「……おなか、くるし……」

呼吸を乱しながら訴えると「そっか」とつぶやいて、先生の体が離れた。

繋がった部分を見下ろしながら私の下腹部を優しく撫でて、ぬる……と半ばまで引き抜かれる。

「あ……」

離れていっちゃう……。

「……痛く、ないです……ごめんなさい、大丈夫だから、続き……」

焦って泣きそうになりながら、先生の腕をつかんだ。

ぐぶんっ……

その瞬間、硬く張り出した部分でゆっくりとクリトリスの裏側を擦られる。ひく、と喉がそり返って息を呑む。

さつき気持ちいいって何度も伝えたところ……。

ぬちっぬちっ、と出し入れを繰り返されて腰が浮く。

「ーあっ、あっ、やっ、やああ……っ」

「ああ、やっぱりここ弱いのが。大丈夫、抜かないから。そのままイッちゃえ、ちゃんと見てやる」

両手で腰を掴まれて、弱くなったところを重点的に浅く叩かれる。

引き抜かれてからまた入ってくるときの、引っかかるような圧迫感が指で撫でられているときよりも広範囲に強く響く。

突き上げられている衝撃と快感をやり過ぎそうと、手がシーツの中を漂ってクッションの端っこをつかんだ。

先生の体が離れてしまったから、つかみたくてもできない。

「あっ……、はああああ……っ」

ひくひくと自分の意思とは関係なく、蜜口が甘噛みを繰り返す。

さっきからいっぱい、気持ちいいところをぐちゅぐちゅにされて自分から動くのもとまらない……。

「あ、……はっ……ああっ」

くちゅくちゅと音を立てている場所に意識を集中させる。先生が動くのに合わせて腰を浮かせて振ってしまう。

絶対、見られてる、恥ずかしい。だけど、気持ちよくてとめられない……。

ああ……、だめ、また……きちゃう、大きい、くる……っ。

「あああああ……っ」

入り口近くにはまった肉竿をきゅうううと強く締め付けた直後、びくびくと体を痙攣させながら叫ぶ。

その瞬間、先生の体が覆い被さってきた。

ぐぢゅうとねっとりした音を立てて勢いよく串刺しにされて、声が出なくて代わりに空気が漏れる。

「ん、ああ、我慢できなかった。ごめんな、乱暴する感じになるけど、もう少し頑張れ」

「あ、はっ……はあっ」

痙攣している最中の肉壁を、荒々しく腰をぶつけて最初から容赦なくほじくられる。

ひとりで勝手に気持ちよくなってしまったから……。先生を置き去りにして何回も絶頂したから……。

昇りつめたばかりで脱力した足がぶらぶらと宙に揺れる。目の前にいるから腕を伸ばせば抱きつくこともできるのに、力が入らない。

「ああ、ぐ、……うう…っ、あ、ああ……っ」

密着した結合部からぬちゅぬちゅと溢れる愛液の音が、掠れた声よりも部屋に響く。

「気持ちいい、な。ずっと締め付けたまま、うねってて、狭くて、すぐイキそうになる」

奥をねっとり突き上げながら、先生が嬉しそうに息をついた。

熱っぽい息が耳にかかって、それだけでまた体が震える。

リズムよく突き上げられるたびにさっきまでの苦しさはいつのまにか消えて、鈍く重たい熱が溜まっていく。指と同じように、馴染んでいる。意識を飛ばしそうになりながら、子宮が先生のかたちを覚えていく。

ひくひくと震えるだけで、私が反応しなくなっただけからか、激しかった動きがゆつくりと優しく起こすようなものになった。何度もギリギリまで引き抜いて、奥まで一気に突き進んでくる。

「あ、はあ……っ」

「ああ、起きた？」

先生が私の顔をのぞきこんで微笑んだ。かと思えば片膝を持ち上げられて、さらに腰が深く沈む。ぐりゅ、と一際敏感な最奥に、張り詰めたカリ首がはまり込む。

「あっ……ぐ、っ」

そのまま小刻みに揺すぶられると、蜜がとめどなく溢れてくる。それを子宮口に塗りつけられて、叩き起こされたナ力がきゅんきゅんと狭まる。

クセになってる……。これが気持ちいいことって、体が理解しちゃうって……。

声はとつくに掠れきっていて、もう出ない。代わりに水をほしがる犬のような小刻みな呼吸音が、涎と一緒に口から漏れる。

深くイッているのに、子宮口を塗りつぶす動きはまだ止まらない。これ以上されたら本当におかしくなりそう……。

「~~~~~っ」

腰を浮かせて喉を仰げ反らせる。頭が真っ白になって、我慢できなくなった下腹部から、ぷしゅっ……と飛沫が飛び散った。

それが合図のように、抽送が一層荒々しくなる。全身にしがみついてめっちゃくちゃに抱きつぶされて、逃げ場のない状態にされて、ぷしゅぷしゅと漏れ出る飛沫が止まらない。お尻の下がどんどんぬるま湯をかけられたように濡れていく。

「……っ、は、出る……っ」

苦しそうな声の後、赤黒く張り詰めたモノが抜かれて、お腹の上に大量の熱が吐き出された。その熱さに下腹部が収縮して、ぷしゅっ、とまた漏らしてしまう。

私の意識はそこで完全に途切れて、次に目が覚めたときは裸でも着ていたスーツでもなくて、袖と丈の長い一目で男物だとわかる黒いパーカーを身につけていた。びしょびしょに濡らしてしまったシャツもいつの間にか新しいものに取り替えられている。

「……先生？」

暗闇の中で呼んでみたけど返事が無い。どこに行っただろう……。

心細くなって、ベッドから降りた。下腹部に鈍い違和感が走って思わず顔がゆがむ。

体に負担がかからないようにゆっくり移動しながらドアを開けると、数メートル先のガラス扉から明かりが漏れていた。

その扉を開けて中に入ると、上下黒のスウェットに着替えてキッチンに立つ先生の後ろ姿があった。

夜遅い時間なのに、火のついたガスコンロの前で料理でもしているのか、湯気が立っている。

「先生？ 何してるの？」

「あ？ お前のスマホ煮てる」

首だけで振り向いた先生が、さざりと言いつつ放った。

「!？」

驚いて絶句している私を気にも留めず、忌々しいものを見るかのように先生が鍋に視線を移す。

走り寄って湯気の立つ片手鍋をのぞき込むと、真っ黒になった画面の見慣れたスマホが気泡と一緒になくなってぐらぐらと揺れていた。

「だってうるせえんだもん、さっきからブルーと。何時だと思ってんだよ、帰らないって丁寧に電話したのによ。お前だっていらねえだろ、こんな毒親ホットライ
ン」

言い訳のような言葉を並べて眉間にしわを寄せながら、機嫌の悪さを隠そうとしない。こんなに怒った顔の先生は初めて見る。

自分のスマホを壊されているのに、私は先生のしたことを咎めたり眉をひそめたりできなかった。

むしろ母親からしか連絡の来ないスマホが手元から無くなって、ほっとしていた。ただ連絡の手段を絶ったというだけで、根本的な解決にはなっていないのに、壊れたから鳴らないというだけで長年の重荷がほどけたような気分だった。

「新しいのは、明日買おう。服も必要だな。……ああ、あとは、これもか」

話しながらすたすたとキッチンからリビングへ移動する先生の後ろを、ひよこのようにくっついて追いかける。

先生はリビングのガラステーブルに置かれたキーケースから一本の鍵を外すと、振り向いて「はい」と私の手の平の上にそっと乗せた。

「今日からお前の家はここです。それ、スベア作ってねえから無くすなよ」

「え、ええつ、そんな、そこまで迷惑かけられませんか」

「迷惑？ 何が？ 俺、お前が思ってるほど善人じゃないよ。今もイライラやばくてスマホ茹でちゃったし、かつての教え子を欲望のまま軟禁しようとしてるもう頭おかしい奴よ？」

先生はそう言う、ガラステーブルから今度はタバコの箱を持って私の前を通り過ぎ、キッチンへ戻っていった。

ガンツ、と重厚そうな音を立てて、片手鍋が乱暴にシンクへと投げられる。湯気がぶわりとシンクを覆って、熱風がここまで来そうなくらいだった。

先生はそのままガスコンロの前に立ったかと思うと、今度は稼働する換気扇の下でタバコに火をつけた。

「軟禁」という言葉を頭の中で繰り返しながら、手の中の鍵を見る。

こんな優しい軟禁があるわけではない。

普段の生活のほうで、尊厳をぐちゃぐちゃに踏み荒らされているから、先生と一緒にいられるなんてそれだけで天国みたいなものだ。